戦争特集
38度線を越えて

▲ 戦争で敗戦となり炎天下を徒歩で南下する避難民たち。（絵はすべて早野朝子さんが描いたものです）

毎年、広報8月号では、8月15日の終戦記念日に合わせて、戦争の記憶を風化させないために、平和について考える特集を組み、悲惨な事件や体験談を紹介してきました。

今年は、戦時中に咸鏡南道の咸興（現在の朝鮮民主主義人民共和国）で生まれ育ち、現地で敗戦を迎え、必死の思いで38度線を越え帰国された、早野朝子さん（野市町）。戦争の悲惨さを後世に伝えるために、早野さん自身が描いた絵と共に引き揚げ体験を掲載します。

咸興での生活

昭和16年12月8日、太平洋戦争は日本軍のハワイ真珠湾攻撃から始まりました。アメリカ、イギリスを敵に開戦。4年目の夏、私は朝鮮半島の北に位置する、咸鏡南道咸興で15歳の女学生でした。

戦時中の学校生活は、軍服のボタン付けや食糧増産や救急看護実習と、戦争との繋がりがあったものの、今思い返すと楽しい日々でした。敗戦を迎えるまでは。

戦争敗戦

昭和20年8月8日、ソ連が日本に宣戦を布告。そして8月15日、戦争終結のラジオ放送が流れ、日本の無条件降伏を知らされました。学校中に衝撃が走り、号泣したことを覚えています。

それから一週間ほど経ち、敗戦によって、いつもより静かになった街で不安な近況を家族で語り合っていた時、遠くから微震が伝わってきました。その地面に伝わる振動は次第に激しく、やがて耳を覆うばかりの轟音となって迫ってきました。

戦車のキャタピラの音でした。

ソ連軍の進駐

自動小銃を手にした兵隊を満載したソ連軍のトラックや戦車が切れ目なく続く異様な光景。それまでふるさとだった土地は一瞬にしてソ連軍の占領地となりました。咸興に進駐してきたソ連軍はほとんどが囚人兵。地獄の様な日々の始まりでした。

敗戦国となれば圧倒的に弱い存在です。何をされるかわかりません。そのため、多くの家が玄関に五寸釘を打ち込み、破れ障子をはめ込み空き家に見せかけ、ひっそりと身を隠していました。

▲ ソ連兵による略奪、暴行

進駐の翌日、障子穴から町内を見渡していると、同級生の家が数名の兵隊に襲われていました。このような状況では昼夜関係なく兵隊が銃で威嚇し見境なく略奪や暴行が繰り返されていました。

日本人難民となった日々

その年の冬、ソ連軍の侵攻により咸興より北の地域から戦火に追われた避難民が多くやってきました。夏服のまま、着のみ着のままで集結した人々が近くの駅前広場で野宿をしていました。

その後避難民の収容が始まりましたが、食べ物も無く、身にまとう物もありません。火の気の無い屋内は既に氷点下。私の家にも収容者が41人。身動きができなくなりました。

消える命の灯火

ある日1階からワーッと泣く声が聞こえ、行ってみると、背中の赤ん坊の息がありません。抱きしめ泣きじゃくる母親。寒さと不衛生、栄養失調の状態で眼孔は落ち、その顔はドクロそのままでした。また2階の住人だった、いつも笑顔の歌の上手な女の子は、地獄の中の天使のようでしたが、肺結核を患いその一家は全滅してしまいました。今もあの歌声が聞こえてくるようです。

咸興では住んでいた1万2千人に対し、2倍以上の避難民が入り不潔な密集生活を余儀なくされていました。そのため伝染病が猛威をふるい、毎日のように大八車に載せられた死体や、背中に亡くなったわが子を背負い埋葬に向かう姿を見送りました。人づてに亡きがらから指一本を切断して持ち帰った父親がいたという話を聞きました。ゴミのように捨てられる愛し子の唯一の形見にしたのだと思います。このような光景が日常茶飯事になり、終戦から一年の間に咸興市内の死者は6，261人にまで達したそうです。

▲ 亡くなった赤ん坊。母親の背中で息を引き取っていました。

越境に向けて

翌年の5月、私たちの家族は大勢の日本人と共に38度線を突破するため咸興を出発しました。突然の出発のように感じていましたが、今まで動かずに耐えていたのは野宿が可能な季節を待ち、海の荒れる冬を避けて安全に帰国するためと後で知りました。

日本人の南への移動は困難を極めました。38度線はソ連軍が封鎖しているばかりでなく、道（県）外への移動が禁止されていたからです。

列車での南下

それでも秘密裏に支度を調え咸興駅に集合し100人単位の班に分かれ出発を待ちました。出発直前に車両の一部が外され、残された人たちもいましたが、私たち家族は何とか乗り込むことができました。

列車の中には百数十人が無理やり詰め込まれたため三分の一くらいの人が座れないような状態でした。私に至っては片足しか地に付けることができず足が痛みました。ただ、この苦しみの向こうには祖国日本があると思い、一途に堪え忍んでいました。

元山に到着すると昨日から一度も外に出してもらっていないため、便所だ、水だとみんなが飛び出していきました。ただ耐えきれず人前をはばからず用を足してしまう人も多く、駅のホームは辺り一面汚物だらけになっていました。元山からは貨車が二分されたり、急停車したりしましたが無事に鉄原駅に到着しました。その安堵もつかの間、次に列車が動き始めると、先ほど来た道を帰り始めています。疲労困憊のあげくがこの始末。38度線を目前にと言う悔しさ、絶望感にうちひしがれました。

早野朝子さん（83歳）